

甲申
新版

榮達足利往来 完

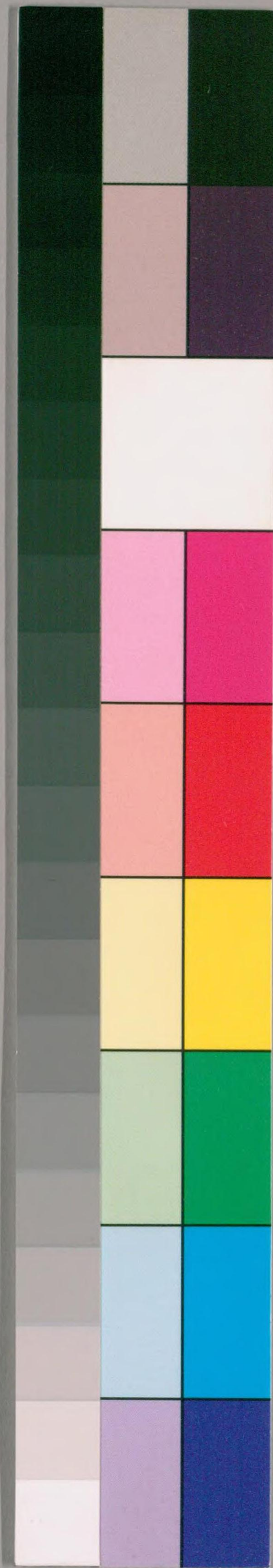
元版



○卷中目録
浮島河原合戦場
十幹十二支の解
十二支指掌圖
六壬時占の事
病算占の傳
厄歳之説話

858
66

取扱
帳入



文政未春新販

重田一九換

栄達足利往来

京都本問丸

錦耕堂本番持

緒

言

精範印

いやはやふかきなるは源平代の昔はちの如く一の積武共
 画双帝錦「松小残」里して「さか」なるの教ひとらなるは
 事の味「綿」耕堂のあゝ「山」なるは「あゝ」なるは「あゝ」なるは
 仕「り」なるは「小」初學子の「手」跡「松」吉「武」士の「戦」場「み」向「ふ」
 の「如」く「中」て「降」ると「大」將軍「と」「一」年「の」末「の」左「刀」長「刀」の
 お「と」く「その」切「る」を「教」ひ「し」む「る」は「父」母「の」感「化」み「あ」ら「る」
 事「々」や「教」へ「る」本「の」お「も」む「き」み「接」して「の」教「向」た「の」教
 よ「し」る「不」教「も」此「に」利「武」將「の」る「運」ち「あ」る「と」編「呈」
 合「せ」ぬ「年」は「別」れ「る」事「は」合「成」る「に」

文政癸未未

十返文吉徳



十幹十二支之度

甲丙戊庚壬と又
陽と乙丁己辛癸
と又陰とは天の教の
五ふと五陽五陰と
合せて十幹と一と
天子と各々く地の教の
六ふと六陽六陰と
十二支と一と地を
各々く十幹の各々の
陰陽と又星中と
各々ふ恵止と稱す



榮達足利往來

抑是利治部之彌考

氏者清和天皇十及代

贊波身深自氏之勇

必其祖嘗之居徑下體

國之利故稱氏之

利世興北余眾修城各

坐下後于時元弘之亂

楠公成有洞列千毅破

之傳防討於東軍數百

惠の足るり止んか
甲申の乙申の皆かの

ゆ〜上界〜してこを
稀まろ軟今俗共十

二支も又混ぶと
ひる〜〜〜

鼠

虎

龍

蛇

馬

羊

兔

牛

鶏

猪

狗

猿

鹿

牛

馬

羊

猪

狗

猿

鹿

牛

十二支指掌目

あまのそ羊の殺と
てそま支とあまの
あつ年と公弄て支と
あつ捷法るり
次小記を指掌の

仁科

思也依るるる氏世の時

命道を安於鎌倉

窺村表裏長持公

官軍倒る此象抄

六波羅其頃為新田

こめふくぬらうの

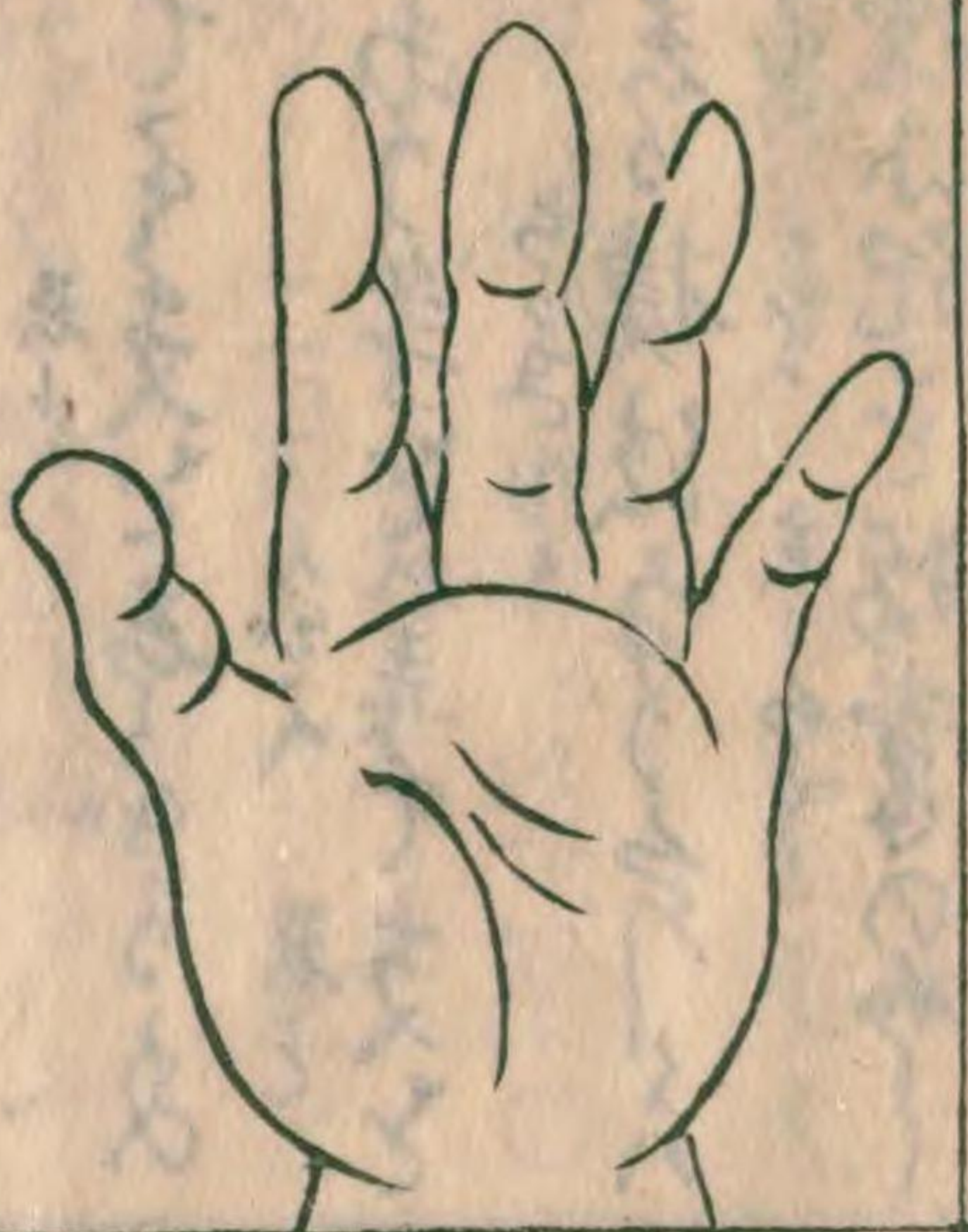
貞鎌倉と本族衰減

亡年終も天皇富貴

海衛一統離る自と時

甘藷家行然准辰大

使教あ思遂倒る有



此は十葉下のもの
 もある年の支のよ
 一二三と違ふうも
 殺りど等て支と
 る十葉上の人の
 年の支あり中二間
 減て十と一を減
 皆一間を減て二十
 三

有餘の殺り又違ふ
 一二三四と九も
 び入てあるあり
 當年子の年るま
 五と二十又葉の
 支の他小ありとい
 當年の支子年るま
 を各指の年小あり
 支子の和より中二
 減て十と一又二
 二十と一を減て
 三十と一を減て

和

ありとどありてとらうぢがらんまんの
 國もは尊はは之敵は之
 賜書も認威推塔崇ま
 時相模次常時行何
 間催連累作丸と度考
 此のつれさざらうそれゆまきひみを

氏奉召事征る由減之
 其勢大振遂為吉臣彼
 推對の自稱征費大振軍
 留後名怨事案別之政
 道剽奉殺大塔宮之罪

逢小二三四五くまの
年小三十三くまの
寅とらのとらのとらのとら
六壬時のとら



此法こののとらのとらのとら正
月つきのとらのとら日ひを
記しる一日いちにちのとらのとら時ときをしる

またとまたとと三月みづきのとらのとら
時ときのとらのとらのとら大安たいあんのとら
とと正月しょうげつのとらのとら二月にがつと
かかのとらのとらのとら速すみのとらのとら三
月みづきのとらのとらのとらのとらのとら
朔しつ日にち二ふた日にちととのとらのとらのとら
又また日ひのとらのとらのとらのとらのとら
此このとらのとらのとらのとらのとら
子こ世よ寅とら卯うととのとらのとら
辰たの時とき將まさ吉きちのとらのとら
もものとらのとらのとらのとらのとら
○大安たいあん 大たい吉きちのとらのとら
小こ神かみのとらのとら

發はつ光ひかりのとら陣じん附つ方かた夜よのとら夢ゆめ
伏ふ定じやう法ぽう先せん朝あさのとら朝あさのとら朝あさ
活くわつのとらのとらのとらのとらのとら
挿さつ身み陶たう於お年ねん活くわつのとら書しよ
於お軍ぐん上じやう軍ぐん年ねん活くわつのとら書しよ
成じやう威いのとらのとらのとらのとらのとら

大たい軍ぐんのとらのとらのとらのとらのとら
相さう行ぎやう本ほん及及び活くわつのとらのとらのとら
食じき戰せん活くわつのとらのとらのとらのとら
其そののとらのとらのとらのとらのとら
其そののとらのとらのとらのとらのとら
諸しよ軍ぐんのとらのとらのとらのとらのとら
會かいのとらのとらのとらのとらのとら



右六主將のうらみひの
和傳こも小日用ま
あつせんわ
けのうははとんじ



之病算うらみひ
相傳唐一行は味の
びんせんうらみひ
之病算うらみひ
のきつはう

正五九月

會馬 無 無 無 無 無

祿 馬 祿

二六十月

馬 祿 馬 無 會 無 馬

無 會 祿

三七十一月

祿 無 祿 無 祿 無 無

無 無 馬

四八十二月

馬 祿 馬 無 會 無 馬

祿 無 祿

このうらみ せん せん のころ 久つて せんをみびり
なま 蚊力之切 かな 靡 衆

追之 報 官 家 にも 族 群 する
あひく せんせとそむくの やうう せん せん

忽成 雲 霞 之 大 軍 出 進
ちちちち せん せん の せん せん と せん せん

後九 別 今 也 可 雷 令 松 之
せん せん せん せん せん せん せん せん

聚 存 弟 方 中 義 義 帥 出 後 山
せん せん せん せん せん せん せん せん

陽 之 軍 之 飄 漢 河 也 旗
せん せん せん せん せん せん せん せん

言 氏 之 西 國 之 軍 之 諸 將
せん せん せん せん せん せん せん せん

連 海 船 之 帆 入 煙 沈 散 矣
せん せん せん せん せん せん せん せん

絲 波 之 初 也 有 追 東 師 之
せん せん せん せん せん せん せん せん

注 之 如 挽 荷 苗 園 之 新
せん せん せん せん せん せん せん せん

馬 並るるハ病治まじ
さうさなるハ死まじ
後なるハ 孫 並るるハ
子連より 孫 並るるハ
さものりく事あり 孫 並るるハ
るるハあやうしよこるるハ
病ひる 大の月ハ上より
あやうまじ 病あやうし
眼小等て病あやうし
日小いよりいよりあやう
小の月ハ下より 孫 並るるハ
かぞへて 朔日よりあやう
病の日小至よりあやう
又病等々一法
先病人の幸いといふ
あはれ平病つれより月

と日と此とつとあはせ
はるる九つとあはせ
の教あてまは凶やま
るり 能合ハ病人四十
七等三月九日より病
つれなるるまじハ病人の
日九と合て二十九と
あはせ
あはせとまじハ三とあはせ
百七十七とあはせ九と
あはせ
あはせとあはせ
あはせとあはせ

田橋之諸將公の維新謀
帝教の不避兵公は教
先之忠膽母術の向横
為濟川發死年此時主
上行軍山ハ長泉主奉守

儲君の英走下出團幸
互苦戦不利の逆陥令
時式昔後化吉凶交相
丸業結易地音事時
天守今泉中河村薄空尊



六のありく丸の治一
かごこちなるぞし



一厄歳之公得

九る人の厄年とらふ
七集 其 五 三 四
甲三 丑 二 六 十一 一 一 一

右の羊人の大忌あり
情物一俗今男女の
厄とまらぬ小男の千五
サハ十九 男甲二廿三十
三を大厄とまらぬ竹ふ
校てうそ教をまらぬ
甲田カ甲二を大厄と
まらぬ
前の年とあ厄とのひ
あや 相と年と後厄とのひ
びんご 大後三年と忌戒の
甲十一 集 小 子 と まらぬ
くまびと甲十二の二

氏凡大少之教大戦外系

負之善戦正成之智徳皆

不遂る留死於黄懐一

堆之下其殊と猛聖群維

彼討斃者後多能是

尊氏氏国府於洛中本

載之執懐了可成威令

統了而者下下年登柳

堂下除世其全良判教

代之定地有京室町通

子とのひて化衆の性
 と衆のくせ仮小化人の
 子とせるさびれ衆の性
 十二の四の字と子の二
 衆の二と合されが四二
 とわあるやへ嫌ふといふ
 殊小或のなるにじき
 ありそる貴人せりあは
 りるり或の所分の
 灰の厄排をほるその
 んとるべさめて編を
 ささるのさるり口の字

まるち口口のんとかく
 皆ちのささるり出逢ひ
 とさるべさるり小人と
 といふに會衆をりか
 まり中せむに會衆
 衆を懐むるに厄
 とさるべさるり口の字
 の上集さるり此のふ
 刀紐のを衆の人と切
 を横綱の性衆の心
 小へさるり口の字
 らの勅むるさるり

今出川之北教世々稱室所
 聖而後海内流る静溢
 之懐外可民安堵之床
 欽白
 十返舎一九著

新板性衆物目錄	弓勢為朝性衆
菅神御代文章	頼光山入性衆
糸編百工性衆	頼朝長切性衆
兒女長成性衆	義経勇壮性衆
万得廻船性衆	曾畧本曾性衆
新換曾我性衆	楠三代性衆
英将義家性衆	列心勢新田性衆
文政六年来季春發販	
東武馬喰所武丁目	
池本問屋 錦耕堂	
山口屋 藤玄衛	
上梓	

558
66



国立国会図書館 タイトル『栄達足利往来』 請求記号 858-66

ガラス使用